

# 高齢者のスポーツボランティア行動の予測と心理的恩恵に 関する研究

—「健康的な」まちづくりを目指して—

堀田 亮\*  
藤原 大樹\*\* 谷本 英彰\*\*\*

抄録

本研究では、まずはじめにスポーツイベントやスポーツボランティアの実態を調査した。続いて、スポーツボランティア行動に対する意識を調べ、理論に基づき行動を予測する要因を明らかにした。最後に、スポーツボランティア行動をすることによる恩恵を明らかにし、継続するために必要な要因を探った。

対象者は、ウォーキングイベントの参加者 408 名ならびにウォーキング事業に参加した 65 名であった。調査項目は、スポーツイベントの参加動機や情報源、スポーツボランティアの実施や認知であった。また、計画的行動理論の変数（態度、主観的規範、行動の統制感、行動意図）やトランスセオレティカル・モデルの変数（変容ステージ、恩恵、負担、意思決定バランス、エフィカシー）についても調査を行った。さらに、自尊感情や主観的幸福感といった心理的変数に加え、社会的スキルや社会的ネットワーク、まちへの愛着などの社会的変数についても調査した。

分析の結果、スポーツイベントの参加動機としては、「健康づくり」が最も多く、情報源では広報が多かった。一方、スポーツボランティアについては、まだ実践者は少なく、認知度も低かった。また、スポーツボランティア実践者のほうがボランティア行動に対し好意的であり、自信を持っていた。計画的行動理論とトランスセオレティカル・モデルをボランティア行動に対し用いたところ、計画的行動理論のほうが理論的に優位性を有していた。さらに、ボランティア行動が自尊感情など心理的変数や社会的スキルといった社会的変数にもたらす恩恵について検討したが、顕著な効果はみられなかった。

本研究より、スポーツボランティア行動は、計画的行動理論により予測できる可能性が示唆された。今後、さまざまな地域や対象者で調査し、また国際比較などを行うことでスポーツボランティア研究の発展に寄与するだろう。

キーワード：高齢者、スポーツボランティア、計画的行動理論、トランスセオレティカル・モデル、まちづくり

---

\* 九州大学大学院人間環境学府 〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1

\*\* 保健医療経営大学 〒835-0018 福岡県みやま市瀬高町高柳960-4

\*\*\* 九州大学大学院人間環境学府 〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1

# The study of prediction and psychological benefit of sports volunteer behavior in elderly

—aim for the development of healthy community—

Ryo Hotta \*

Hiroki Fujiwara\*\*

Hideaki Tanimoto\*\*\*

## Abstract

This study examined the picture of sports event and volunteer. Also, we investigated a consciousness of sports volunteer behavior and predictor of it based on theory. Finally, we surveyed the benefit of sports volunteer and explored factors necessary for adherence.

The subjects were 408 participants in walking event and 65 participants in walking project. The survey items were reason and information source of sports event, and practice and awareness of sports volunteer. The variables of Theory of planned behavior (attitude, subject norm, perceived behavioral control and intention) and Transtheoretical Model (stage of change, pros, cons, decisional balance and efficacy) were investigated. Psychological variables such as feelings of self-esteem and subjective happiness and social variables like social skill, social network and attachment to community were also surveyed.

The results indicated that to get healthy is the most common reason of participation in sports event and publication is the most available source. The practitioners and awareness of sports volunteer were not much yet. Sports volunteer practitioners had more favorable attitude and efficacy than non-practitioners. Also, Theory of planned behavior gained an advantage over Transtheoretical Model in theory for sports volunteer behavior. However, sports volunteer behavior did not have clear effect to psychological and social variables.

The present findings suggest that sports volunteer behavior may be predicted by Theory of planned behavior. They will contribute to the development of sports volunteer study by investigation of many community and people or international comparison.

Key Words: elderly, sports volunteer, Theory of planned behavior, Transtheoretical Model, community development

---

\* Graduate School of Human-environment Studies, Kyuushu University

〒 816-8580 Kasuga Koen 6-1, Kasuga, Fukuoka

\*\* College of Healthcare Management

〒 835-0018 Takayanagi 960-4, Setaka, Miyama, Fukuoka

\*\*\* Graduate School of Human-environment Studies, Kyuushu University

〒 816-8580 Kasuga Koen 6-1, Kasuga, Fukuoka

## 1. はじめに

内閣府の「平成 23 年度版高齢社会白書」によると、わが国における高齢者人口は、平成 22 年 10 月 1 日現在、過去最高の 2958 万人（前年 2901 万人）に達し、総人口に占める割合（高齢化率）は 23.1%（前年 22.7%）となっている。すなわち、わが国では国民の 5 人に 1 人が高齢者というのが現状である。また、平均寿命は 2009 年 10 月現在、男性 79.6 歳、女性 86.4 歳であり、約 15 年から 20 年は老年期とよばれる時間を過ごすことになる。この時期をいかに心身共に充実した時間として過ごせるかは、本人や家族にとっても社会にとっても重要であると思われる。

わが国ではこのような現状に対し、地域高齢者の社会活動としてさまざまな趣味・レクリエーションに関わるプログラムが行われている（高橋ら, 2000）。これらの活動は「生きがいづくり」として捉えられていることが多い（長谷川, 2003）が、単に「生きがいづくり」のみを目的とするのではなく、急速な少子高齢化が進むわが国においては、高齢者の社会活動を社会全体の活性化につなげることを考える必要があるとされている（厚生労働省, 2000）。そして、このような社会全体の活性化につながる活動の 1 つとしてボランティア活動が考えられる。

総務省（2006）が行った平成 18 年社会生活基本調査によると、過去 1 年に何らかのボランティア活動を行った者は、男性で 1387 万 7 千人、女性で 1584 万 5 千人と計 2972 万 2 千人にも上る。ボランティア活動者の内訳をみると、60 歳代が 40.9%、ついで 70 歳代が 22.5%、50 歳代が 17.7%と、ボランティア活動者の 65.7%が 60 歳以上であることが報告されている（社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2010）。

ボランティア活動への参加が高齢者に及ぼす効果については、藤原ら（2005）が先行研究を概観し、生活満足感、抑うつ度、自己統制感、自尊心といった心理的側面への効果を報告している。しかし、その一方で藤原ら（2005）は、ボランティア活動の内容による効果の違いについて分析した研究が少ないことを課題として指摘している。

ボランティア活動にはさまざまなものがある。先に紹介した平成 18 年社会生活基本調査は、ボランティア活動を「まちづくりのための活動」、「自然や環境を守るための活動」、「子供を対象とした活動」、「安全な生活のための活動」、「スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」など計 10 の活動に分類している。この中で、近年オリンピックなどを始めとするスポーツでのボランティア活動に注目が集まっている。笹川スポーツ財団（1996）によると、

このようにスポーツ推進のために行う活動に参加したボランティアは「スポーツボランティア」と定義され、地域におけるクラブや団体の指導者や運動スタッフとして日常的に活動するコミュニティ・ボランティアと世界選手権のような国際大会で不定期に活動するイベント・ボランティアに分類される。

このようなスポーツボランティアに関する研究からは参加動機、活動期待・満足、継続意欲、情報入手など多くの知見が得られている一方で、活動領域の違いによる特性など、今後さらにボランティア活動者をさまざまな視点からアプローチした研究が望まれるとされている（松本, 1999）。ところが、スポーツボランティアを対象とした研究というのはまだ緒についたばかりであり、ほとんど見当たらない。

そこで本研究では、スポーツボランティアに焦点を当て、理論に基づきながらスポーツボランティアがもたらす効果について検討することとした。理論を用いた研究を行うことで、今後さまざまな地域や対象への応用や国際比較などが可能となり、今後のスポーツボランティア研究に寄与するものと考えられる。

## 2. 目的

本研究の目的は、① スポーツイベントやスポーツボランティアの実態を調査すること（研究 1）、② 理論に基づきスポーツボランティア行動に対する意識を調べ、行動を予測する要因を明らかにすること（研究 2）、そして、③ スポーツボランティア行動をすることによる恩恵を明らかにし、継続するために必要な要因を探ること（研究 3）であった。

また、スポーツボランティアに対する意識やスポーツボランティアをして実感したこと、あるいは実際に地域に住んでいるボランティア実践者が抱えるまちづくりへの思いなど、アンケートだけでは捉えることができない事柄について、インタビューにより調査した。

## 3. 方法

### 1) 対象者

研究 1：F 県 C 市にて開催されたウォーキングイベントの参加者 408 名

研究 2：F 県 C 市で行われた「なかなかよかチャレンジウォーキング事業」に参加した 65 名

研究 3：研究 2 と同じであった

### 2) 調査項目

研究 1

## (1) デモグラフィック要因

性(男性・女性)ならびに年代(10代以下, 20代, 30代, 40代, 50代, 60代, 70代, 80代以上)について尋ねた

## (2) ウォーキングイベントに関する項目

## ① イベントへの参加動機

イベントへの参加動機について、「健康づくりのため」、「誘われたから」、「コースに魅力を感じたから」、「史跡めぐりに興味があつたから」、「市の健診や病院等の検査結果で運動が必要と感じたから」、「参加賞があるから」、「昨年参加してよかったから」、「その他」のなかから、あてはまるものすべてを選択する方法で測定した。

## ② イベントについての情報源

イベントの情報をどのように知ったか、その情報源について、「広報」、「市の公式ホームページ」、「チラシ」、「ポスター」、「友人」、「家族」、「ボランティアスタッフ」、「市の職員」、「その他」のなかからあてはまるものすべてを選択する方法で測定した。

## (3) スポーツボランティアに関する項目

## ① スポーツボランティアの実施

「現在、本ウォーキングイベントのような運動・スポーツイベントのボランティアをしていますか」という設問に対し、「している」、「していない」という回答カテゴリーで2段階評価を行った。また、スポーツボランティアをしている、あるいはしていない理由について、自由記述により回答を求めた。

## ② スポーツボランティアの認知

「本ウォーキングイベントをサポートするボランティアスタッフがいることを知っていましたか」という設問に対し、「知っていた」、「知らなかった」という回答カテゴリーで2段階評価を行った。

## 研究2

## (1) 計画的行動理論(Ajzen, 1985: 1991)の変数

## ① 行動意図

行動意図は、「今後6ヶ月以内に運動・スポーツボランティアをしたいと思いますか」という単項目の設問に対し、5段階評価で測定した。「きっとしないだろう」を1点、順次意図が高くなるにつれて、2, 3, 4, 5点を付与し、得点を算出した。すなわち、得点が高い者ほどボランティア行動の意図が高いことを意味する。

## ② 態度

ボランティア行動に対する態度は、「今後6ヶ月以上継続的に運動・スポーツボランティアをしたら、どのようになると思われますか」という設問に対し、「楽しい」など6項目に対する態度を尋ねた。回答は5段階評価であり、「まったくそう思わない」を1点、順次好意度が高くなるにしたがい、2, 3, 4, 5点を付与し、6項目の総和得点を算出した。つまり、得点が高い者ほどボランティア行動に対する態度が好意的であることを意味する。

## ③ 主観的規範

主観的規範は、「あなたの家族はあなたがボランティア活動に参加することを期待していると思いますか」など3項目の設問に対し5段階評価で測定した。「まったくそう思わない」を1点、順次主観的規範意識が高くなるにつれて、2, 3, 4, 5点を付与し、3項目の総和得点を算出した。すなわち、得点が高い者ほどボランティア行動に対する主観的規範意識が高いことを意味する。

## ④ 行動の統制感

行動の統制感は、「あなたは、もしボランティア活動をするとしたら、少なくとも週に1回以上することが出来ますか」など、3項目で測定した。回答は5段階で評価した。最も否定的な回答を1点とし、順次好意度が高くなるにつれて、2, 3, 4, 5点を付与し、3項目の総和得点を算出した。よって、得点の高い者ほどボランティア行動への統制感が高いことを意味する。

## (2) トランスセオレティカル・モデル(Prochaska et al., 1992)の変数

## ① 変容ステージ

変容ステージは、現在およびこれから先の6ヶ月間の運動・スポーツボランティア活動の関わりについて、「1. 私は現在、ボランティア活動をしていないし、またこれから先(6ヶ月以内)もするつもりはない」(前熟考期)、「2. 私は現在、ボランティア活動をしていないが、これから先(6ヶ月以内)に始めようと思っている」(熟考期)、「3. 私は現在、ボランティア活動をしているが、定期的ではない」(準備期)、「4. 私は現在、ボランティア活動をしているが、始めてからまだ間もない(6ヶ月以内)」(実行期)、「5. 私は現在、定期的なボランティア活動をしており、長期(6ヶ月以上)にわたって継続している」(維持期)の中からあてはまるものを尋ねた。数字が高い者ほど習慣的にボランティア活動を行っていることを意味する。

## ② 恩恵

妹尾・高木 (2003) が作成した援助成果尺度を参考に、ボランティア行動による恩恵を「やりがい」など 5 項目で尋ねた。回答カテゴリーは、「全くそう思わない」から「とても思う」の 5 段階評定であり、「全くそう思わない」を 1 点、順次恩恵が高くなるにつれて、2, 3, 4, 5 点を付与し、5 項目の総和得点を算出した。すなわち、得点が高い者はボランティア行動に対する恩恵を高く感じていることを意味する。

## ③ 負担

ボランティア行動に対する負担を「ストレス」などの 5 項目で尋ねた。回答カテゴリーは、「全くそう思わない」から「とても思う」の 5 段階評定であり、「全くそう思わない」を 1 点、順次負担感が高くなるにつれ、2, 3, 4, 5 点を付与し、5 項目の総和得点を算出した。よって、得点が高い者はボランティア行動による負担感が大きいことを意味する。

## ④ 意思決定バランス

恩恵の総和得点から負担の総和得点を減算し、算出した。

## ⑤ ボランティア行動に対するエフィカシー

ボランティア行動に対するエフィカシーは、「少し疲れているときでも、ボランティアをする自信がある」など 4 項目で尋ねた。回答カテゴリーはいずれも「全くそう思わない」から「とても思う」の 5 段階評定を行い、「全くそう思わない」を 1 点、順次エフィカシーが高くなるにつれ、2, 3, 4, 5 点を付与し、4 項目の総和得点を算出した。すなわち、得点が高い者ほどボランティア行動に対する自信が高いことを意味する。

## 研究 3

### (1) 心理的変数

#### ① 自尊感情

自尊感情について、Rosenberg (1965) により作成された自尊感情尺度を山本ら (1982) が翻訳したものをを用いた。自尊感情尺度は 1 因子 10 項目からなる尺度であり、5 段階で評定された (1: あてはまらない~5: あてはまる)。得点の範囲は 10~50 点であり、得点が高い者ほど自尊感情は高いことを示す。

#### ② 主観的幸福感

主観的幸福感について、Lawton (1975) が作成した改訂 PGC モラール尺度を古谷野

(1981) が邦訳したものをを用いた。本尺度は、心理的安定 (6 項目)、孤独 (6 項目)、老いに

対する態度 (5 項目) の 3 因子 17 項目からなる尺度である。回答方法は、2 件法 (1: はい 2: いいえ) であり、得点の範囲は、心理的安定と孤独が 6~12 点、老いに対する態度が 5~10 点であった。このうち、心理的安定と老いに対する態度の因子は得点が高い者ほど心理的に安定しており、老いに対する態度が良好であることを示す。一方、孤独の因子は得点が高いほど孤独感が強いことを示す。

## (2) 社会的変数

### ① 社会的スキル

社会的スキルについては、菊池 (1988) の社会的スキル測定尺度 (KiSS-18) を用いて測定した。本尺度は 1 因子 18 項目からなる尺度であり、5 段階で評定された (1: いつもそうでない~5: いつもそうだ)。得点の範囲は、10~90 点であり、得点が高い者ほど社会的スキルが高いことを示す。

### ② 社会的ネットワーク

社会的ネットワークについて、馬場 (2004) の定義を参考に、社会的ネットワークを「個人を取り巻く社会関係の量 (規模)」として捉えた。具体的には、「あなたは現在、ボランティアを通して出会った友人が何人いますか」という問いにより、友人の人数を測定した。そして、「0 人」、「1-5 人」、「6-10 人」、「11-20 人」、「21-30 人」、「31-40 人」、「それ以上」に分類し、「0 人」に 1 点、順次友人の人数が多くなるにつれて、2, 3, 4, 5, 6, 7 点を付与した。すなわち、得点が高い者ほどボランティア活動を通して知り合った友人の数が多いことを示す。

### ③ まちへの愛着

まちへの愛着については、唐沢 (1994) の国民意識 (ナショナル・アイデンティティ) 尺度のなかで、「愛国心」にあたる項目をまちへの愛着を表す内容になるように修正したものをを用いた。本尺度は 5 項目からなる尺度であり、5 段階評定で測定した (1: 反対~5: 賛成)。「反対」を 1 点、順次愛着が高くなるにつれて、2, 3, 4, 5 点を付与し、5 項目の総和得点を算出した。すなわち、得点が高い者ほどまちへの愛着が強いことを示す。

## 3) 仮説

### 研究 1

イベントへの参加動機や情報源は偏りがあると同時に年代差がある。また、スポーツボランティアの実施や認知は未だ低い。

研究2

ボランティア活動を行っている者ほど行動意図、態度、主観的規範、行動の統制感といった計画的行動理論の変数の得点は高い。トランスセオレティカル・モデルの変数については、ボランティア活動を行っている者のほうが恩恵や意思決定バランス、エフィカシーは高く、負担は低い。

研究3

ボランティアを行うことで、自尊心や主観的幸福感といった心理的側面が良好になると同時に、社会的スキルや社会的ネットワーク、まちへの愛着などの社会的な側面も良好になる。

4. 結果及び考察

研究1

1) 対象者の属性

対象者の属性としては、男性が150名(39.4%)、女性が231名(60.6%)と、今回のウォーキングイベントに関しては女性の参加者が多かった。また、年代についてみたところ、60代と70代が合わせて262名と全体のおよそ66%を占めていた。しかし、10代以下と20代は計18名(4.5%)と、ほとんどおらず、若い年代の者が参加するための方法を考える必要があると思われる。

2) ウォーキングイベント

本ウォーキングイベントに参加した動機について尋ねたところ、40代以上では「健康づくり」と答えた者が最も多かった。一方、10代から30代については、「(他人から)誘われたから」と回答した者も多かった(表1)。すなわち、他者からの声かけをすることがスポーツイベントへの若い年代の参加を促す可能性があると考えられる。

表1 年代別にみたイベントへの参加動機

年代	健康づくり	誘い	コースの魅力	史跡めぐり	健康診断などの結果	参加賞	昨年の参加
	%	%	%	%	%	%	%
10代	41.7	33.3	8.3	0.0	0.0	0.0	16.7
20代	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0
30代	41.2	35.3	17.6	2.9	0.0	5.9	2.9
40代	65.4	26.9	7.7	11.5	0.0	0.0	3.8
50代	7.5	15.0	2.5	15.0	5.0	5.0	25.0
60代	6.2	21.5	6.9	10.8	3.1	2.3	20.0
70代	7.0	22.0	3.0	21.2	3.8	6.1	10.6
80代	64.7	47.1	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0

続いて、本ウォーキングイベントをどのように知ったか、その情報源について尋ねたところ、い

ずれの年代も「広報」と答えた者が最も多く、全体のおよそ45%であった(表2)。逆に「市の公式ホームページ」や「ポスター」はほとんど情報源とはなっておらず、今後いかにこれらの情報源を活用するかについて考えることが、さらなるイベント参加者の増加につながると思われる。

表2 年代別にみたイベントの情報源

年代	市の広報	ホームページ	チラシ	ポスター	友人	家族	ボランティアスタッフ	市職員
	%	%	%	%	%	%	%	%
10代	20	0	4.7	0	4.7	0	0	0
20代	3.3	0	0	0	16.7	0	50	0
30代	50	5.9	26.5	0	17.6	5.9	11.8	0
40代	4.3	7.7	19.2	3.8	21.7	7.7	15.4	0
50代	4.5	5.0	10.0	12.5	7.5	15.0	20.0	2.5
60代	5.8	3.8	19.2	8.5	11.5	21.5	2.3	10.0
70代	4.9	3.0	12.1	3.8	7.6	8.3	2.3	4.2
80代	2.5	5.9	0	0	11.8	5.9	5.9	5.9

3) スポーツボランティア

現在のスポーツボランティアの実施について、全体のおよそ30%の者がスポーツボランティアを行っていた。ボランティアを行っている理由としては、「自分の健康づくり」の他に「人と交流できる」、「他の人の役に立ちたい」など人間関係に関するものがみられた。一方で、ボランティアを行っていない理由では、「時間が無い」や「休みが無い」といったものに加え、「どのようなものがあるか知らない」といった意見もみられた。

そこで、本ウォーキングイベントをサポートするボランティアスタッフの認知について尋ねたところ、全体の約半数(53.7%)にしか認知されていなかった(図1)。よって、今後どのようにしてスポーツボランティアという存在を広めていくか、その具体的な方略を考える必要があることが示唆された。

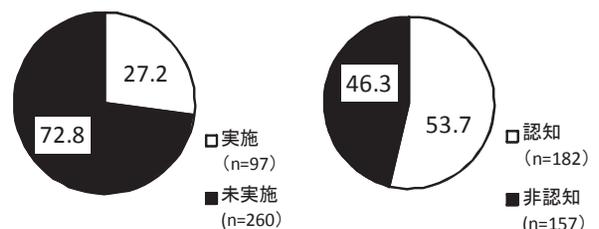


図1 スポーツボランティアの実施と認知

研究2

1) ボランティア実践者と非実践者の違い

スポーツボランティア実践者と非実践者で計画的行動理論の変数(態度や主観的規範、行動の統制感、行動意図)およびトランスセオレティカ

ル・モデルの変数（恩恵，負担，意思決定バランス，エフィカシー）に違いがあるかどうかをみるために，変容ステージをもとに対象者をボランティア実践者（n=35）と非実践者（n=30）に分類し，対応のないt検定を行った。

その結果，計画的行動理論の変数において有意差がみられ，ボランティア実践者はボランティア行動に対する態度が好意的であり，主観的規範，行動の統制感，行動意図は高かった（表3）．トランスセオレティカル・モデルの変数についても同様の傾向がみられ，恩恵や意思決定バランス，エフィカシーはボランティア実践者のほうが良好であり，負担感も低かった（表4）．

計画的行動理論の変数の1つである態度に関しては，ボランティアの活動年数が影響している可能性が考えられる．本研究で対象者としたボランティア実践者35名のうち，28名はすでに6ヶ月以上の長期にわたりボランティアを行っている者であった．そのため，ボランティア活動への好意的な態度がかなり形成されていると考えられる．また，トランスセオレティカル・モデルの負担感に関しては，研究1よりボランティアをしない理由として時間が無いことが挙げられており，非実践者はボランティア活動を行うこと自体を負担と捉えているためだと思われる．

表3 スポーツボランティア実施の有無からみた計画的行動理論の各変数の平均値

	ボランティア実践者 n=35		ボランティア非実践者 n=30		t 値	有意差
	Mean	SD	Mean	SD		
態度	26.1	2.57	22.8	3.79	4.178	p < .01
主観的規範	11.3	2.35	8.5	2.29	4.829	p < .01
行動の統制感	11.8	2.62	8.9	2.86	4.221	p < .01
行動意図	4.5	0.92	2.2	0.79	10.675	p < .01

表4 スポーツボランティア実施の有無からみたトランスセオレティカル・モデルの各変数の平均値

	ボランティア実践者 n=35		ボランティア非実践者 n=30		t 値	有意差
	Mean	SD	Mean	SD		
恩恵	21.7	1.80	18.9	3.87	3.859	p < .01
負担	11.6	3.61	15.0	3.53	-3.824	p < .01
意思決定 バランス	10.1	4.31	3.9	4.95	5.415	p < .01
エフィカシー	15.3	3.57	10.7	3.39	5.356	p < .01

## 2) ボランティア行動に対する理論の適用

続いて，計画的行動理論の変数（態度，主観的規範，行動の統制感）およびトランスセオレティ

カル・モデルの変数（意思決定バランス，エフィカシー）がボランティア行動を予測するかどうかを検討するために，それらの変数を独立変数，行動意図を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った．

分析の結果，態度，主観的規範，行動の統制感はいずれも行動意図に対し有意な規定力を有しており，これら3つの独立変数で行動意図の分散の55.2%を説明していた（図2）．また，意思決定バランス，エフィカシーも行動意図に対し有意な規定力を有しており，2つの独立変数で行動意図の分散の43.5%を説明していた（図3）．

この結果は，計画的行動理論のほうがトランスセオレティカル・モデルに比べ理論的に優位性をもつことを意味する．とりわけ計画的行動理論の中で，行動の統制感の高い規定力（β=.370）を有していた．行動の統制感は，行動遂行に対する容易さと困難さについての信念であることから，いかにボランティア活動をしやすい環境を整えるかが重要な課題となると考えられる．一方で，トランスセオレティカル・モデルにおいても，エフィカシーがかなり高い規定力（β=.425）を有していた．エフィカシーはボランティアを行うことに対する自信の高さを示すものであり，今後ボランティア活動に参加した者がいかに自信を高めるかについて考える必要があると思われる．

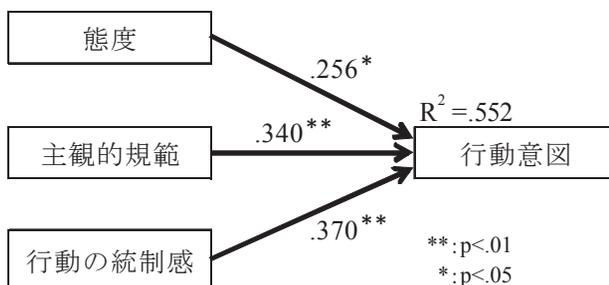


図2 計画的行動理論の各変数を独立変数とする重回帰分析

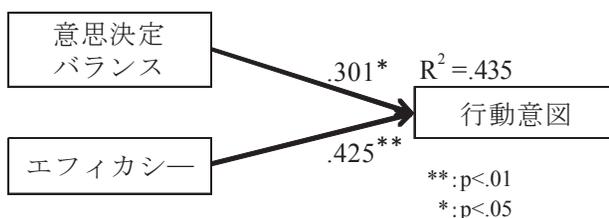


図3 トランスセオレティカル・モデルの各変数を独立変数とする重回帰分析

研究3

1) ボランティア行動による心理的恩恵

F県C市で行われたウォーキング事業に参加した65名の中でデータに不備のなかった55名を対象に、スポーツボランティア行動が自尊感情、主観的幸福感（心理的安定、孤独、老いに対する態度）に及ぼす効果を明らかにするために、群（ボランティア実践者・非実践者）×時期（事業前・事業後）の繰り返しのある2要因分散分析を行った。

その結果、自尊感情、心理的安定、孤独、老いに対する態度いずれの変数においても有意な交互作用は認められず、また群と時期いずれの主効果も認められなかった（表5）。

自尊感情について、事業前後でボランティア実践者と非実践者で違いがみられなかったことに関しては、本研究における対象者の自尊感情がボランティア実践者、非実践者を問わず、かなり良好であったことが影響していると考えられる。そのため、さらに対象者を増やした上で、ボランティア行動が自尊感情に及ぼす効果について再度検討すべきであろう。

また、主観的幸福感（心理的安定、孤独、老いに対する態度）については、他の要因が結果に影響した可能性が考えられる。佐藤（2007）によると、高齢者の主観的幸福感には、健康、社会・経済的地位、社会的相互作用（対人関係）、結婚状況、家庭生活、交通機関の利用可能性、パーソナリティなど多岐にわたる要因が関連していることが明らかにされている。よって、今後はこれら主観的幸福感の関連要因についても測定し、その影響を考える必要があると思われる。

表5 スポーツボランティア実施の有無による心理的変数の変化

	ボランティア非実践者 (n=33)		ボランティア実践者 (n=22)		群	時期	交互作用				
	事業前	事業後	事業前	事業後							
	Mean	SD	Mean	SD	F値	F値	F値				
自尊感情	37.3	5.38	39.2	5.69	3.83	6.53	3.84	7.18	.012	2.336	1.762
心理的安定	7.7	1.85	7.4	1.43	7.1	1.11	7.1	1.43	1.333	1.251	.683
孤独	7.1	1.28	6.9	1.13	6.9	1.07	6.8	1.14	.20	.830	.002
老いに対する態度	6.6	1.37	6.4	1.19	6.4	1.40	6.2	1.45	.28	1.492	.009

2) ボランティア行動による社会的恩恵

続いて、スポーツボランティア行動が社会的スキルやまちへの愛着にもたらす効果を明らかにするために、先ほどと同様に群（ボランティア実践者・非実践者）×時期（事業前・事業

後）の繰り返しのある2要因分散分析を行った。社会的ネットワークについては、ボランティア実践者（n=22）において、ウォーキング事業前後で差がみられるかどうかを確認するために、 $\chi^2$ 検定を行った。

分析の結果、社会的スキル、まちへの愛着いずれにおいても有意な交互作用は認められなかった。そこで群ならびに時期の主効果について検討したところ、社会的スキルについては有意傾向（ $p<.10$ ）であったが、いずれの変数についても時期の主効果がみられ、どちらも事業後のほうが得点は高かった（表6）。なお、社会的ネットワークについては事業の前後で差はみられなかった（ $\chi^2=2.644$ , n.s.）。

ボランティア実践群、非実践群に関係なく社会的スキルやまちへの愛着が高まったことについては、ウォーキング事業のプログラムが関係していると思われる。F県C市で行われたウォーキング事業は、ウォーキングを実践することで、日常の身体活動量を増やし運動習慣を身につけることを目的としたものであった。このことに関して橋本ら（2009）は、身体活動量と社会的スキルには関連があることを報告している。橋本ら（2009）の研究は、若者を対象としていたため単純に比較することはできないが、本研究の対象者においてもウォーキング事業に参加することで身体活動量が増加し、社会的スキルが改善した可能性がある。今後は、ウォーキング事業に参加していない地域在住の者についても調査を行い、ボランティア行動が社会的スキルなどの社会的側面にもたらす効果について明確にすべきであろう。

表6 スポーツボランティア実施の有無による社会的変数の変化

	ボランティア非実践者 (n=33)		ボランティア実践者 (n=22)		群	時期	交互作用				
	事業前	事業後	事業前	事業後							
	Mean	SD	Mean	SD	F値	F値	F値				
社会的スキル	62.3	9.44	64.5	10.53	65.9	8.62	66.9	9.93	1.397	3.132 <sup>+</sup>	.418
まちへの愛着	21.8	3.96	22.2	3.78	20.8	4.75	21.9	4.47	.402	4.339 <sup>*</sup>	.904

\*:p<.05 +:p<.10

インタビュー

スポーツボランティア実践者5名（A, B, C, D, E）に対し、ボランティアによるまちづくりについてインタビューを行った。その結果、以下のことが発話として得られた。

A（ボランティア7年目）

「だから、あの…なんか、そんなのがですね、活性化するにはですね…（中略）なんていうか、子

どもは子ども、大人は大人でいいんですけど、一つにならないかなあって思うんですよ。」

#### B (ボランティア 4年)

「あとは、子どもですかね。(中略)なんか行事がある時なんかは、一緒に応援してやったりね、あるいはアイデアを提供したり。そういうのも必要なんじゃないかと思うですよ。」

#### C (ボランティア 1年目)

「あと、地域でなんか…その地域地域にあるものをね、交流し合えるような、何かがあるといいなって思いますよね。その地区地区では、あつてるんだろうけど、それを今度はお互いに広めあったり、教え合ったりとか…(中略)そういうのがあればいいと思うんですよ。」

#### D (ボランティア 4年目)

「だから、最初は小さくていいから、いろんなボランティアっていうのを作るのも1つの方法かなあって思うんですよ。そしたら、みんながあちこちで動き出して、まち全体…まあ、オーバーな言い方をすれば…それを続けていけばね。」

#### E (ボランティア 3年目)

「(中略)まず、市のイベントづくりはどうしていくのか。それに対する集客をしていくのに、ひとを集めるのにどう我々が動いていくのか。その中でどう考えていくのか。もう少し市がそういうところまで…」

これらの発話をまとめると、まちづくりのためには、①若い世代と協力する、②地域ごとではなく全ての地域が協力する、③ボランティアの多様化、④行政との関わり、が重要な要因になると思われる。このことに関して、スポーツは地域を担う子供のアイデンティティを醸成し、大人をまちづくりに参加させる契機を作りやすいことがいわれている(堀, 2007) 一方で、スポーツイベントにおける参加住民と行政の間でイベントに対する意識のずれが生じていることも報告されている(木田, 2007)。よって今後は、将来を見据え若い世代と関わる機会を作ると同時に、行政と住民が意見を交わし、お互いの考え方を近づける「場」の設定を考える必要があるだろう。

#### 5. まとめ

##### 1) ウォーキングイベントについて調査したところ、

「健康づくり」のために参加している者が多かった。スポーツボランティアについては、実践者が約30%、認知している者が約50%と、未だ十分とはいえない状況であった。

- 2) スポーツボランティア実践者と非実践者を比較したところ、スポーツボランティア実践者のほうがボランティア行動に対し好意的であり、自信を持っていた。計画的行動理論とトランスセオレティカル・モデルをボランティア行動に対し用いた結果、計画的行動理論のほうが理論的に優位性を有していた。
- 3) ボランティア行動による心理、社会的恩恵について検討したが、顕著な恩恵はみられなかった。今後対象者を拡大し、検討する必要がある。
- 4) 今後のまちづくりに向けて、いかに幅広い年代や地域を巻き込んでまちづくりへの意識を高めるか、またこれまで以上に住民と行政が関わる場を作る必要があることが示された。

#### 参考文献

- Ajzen, I. (1985) From intention to actions: A theory of planned behavior. In J. Kuhl and J. Beckman (Eds), Action-control: From cognition to behavior.. Springer, Heidelberg, 2-39.
- 馬場康彦・近藤克則 (2004) 社会的ネットワークと主観的幸福感—縦断分析による検証—. 季刊家計経済研究, 62 : 59-67.
- 藤原佳典・杉原洋子・新開省二 (2005) ボランティア活動が高齢者の心身に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—. 日本公衆衛生雑誌, 52 (4) : 293-307.
- 古谷野亘 (1981) 生きがいの測定—改訂 PGC モデル・スケールの分析—. 老年社会学, 3 : 83-95.
- 長谷川明弘・藤原佳典・星旦二・新開省二 (2003) 高齢者における「生きがい」の地域差: 家族構成、身体状況ならびに生活機能との関連. 日本老年医学会雑誌, 40 (4) : 390-396.
- 橋本公雄, 堀田亮, 山崎将幸, 甲木秀典, 行實鉄平 (2009) 運動・スポーツ活動におけるメンタルヘルス効果の仮説モデル—心理・社会的要因を媒介変数として—. 健康科学, 31 : 69-78.
- 堀繁 (2007) スポーツのもつ可能性とまちづくり 堀繁・木田悟・薄井充裕編 スポーツで地域をつくる. 東京大学出版会.
- 唐沢穰 (1994) 日本人の国民意識の構造とその影響.

- 日本社会心理学会第 35 回大会発表論文集 : 246-247.
- 木田悟 (2007) スポーツにおけるボランティアの役割 堀繁・木田悟・薄井充裕編 スポーツで地域をつくる. 東京大学出版会.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する. 川島書店.
- 厚生省 (2000) 平成 12 年版厚生白書
- Lawton, M. P. (1975) The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. *Journal of Gerontology*, 30: 85-89.
- 松本耕二 (1999) スポーツボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して—. 山口県立大学社会学部紀要論文, 5 : 11-19.
- 内閣府 (2011) 平成 23 年度版高齢社会白書
- Prochaska, J. O., Diclemente, C. C. and Norcross, J. C. (1992) In search of how people change. Applications to addictive behaviors. *American Psychologist*, 47: 1102-1114.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 佐藤眞一 (2007) 高齢期のサクセスフル・エイジングと生きがい 谷口幸一・佐藤眞一編 エイジング心理学 老いについての理解と支援. 北大路書房.
- 妹尾香織・高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果. *社会心理学研究*, 18 (2) : 106-118.
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会 (2010) 全国ボランティア活動実態調査報告書
- 総務省 (2006) 平成 18 年社会生活基本調査
- SSF 笹川スポーツ財団 (1996) スポーツボランティア, スポーツ白書
- 高橋雅延・谷口高士 (2002) 感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開—. 北大路書房.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30:64-68.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。